

就労支援を要する青年期発達障害者の上肢機能の調査

— 年代平均値および標準値との比較より —

○車谷 洋

(広島大学大学院医歯薬保健学研究院)

深津玲子 四ノ宮美恵子 小林菜摘

(国立障害者リハビリテーションセンター)

KEY WORDS: 青年期発達障害、上肢機能、就労

【問題の所在と目的】

青年期発達障害者に対して就労支援を行う時に、様々な作業訓練を実施することがある。その作業訓練の中で、上肢の協調性や巧緻性が低下していると考えられる症例をしばしば経験する。しかしながら、青年期発達障害者の上肢機能に関する報告は散見されず、同年代と同程度の上肢機能であるのか、就労レベルの上肢機能であるのか、未だ明らかになっていない。

よって、本研究の目的は、就労支援を要する青年期発達障害者の上肢機能の横断的評価を実施し、上肢機能の特徴を捉えることである。

【方法】

就労支援を受けている青年期発達障害者8名を対象とした。対象者は全例男性であり、平均年齢は 23.8 ± 2.1 歳であった。

診断名は特定不能広汎性発達障害が2名、アスペルガー障害が1名、自閉性障害が5名であった。知能検査結果はVIQが平均91.4、PIQが平均78.8、FIQが平均84.4であった。

これらの対象者の上肢機能を調査するために、握力、ピンチ力、簡易上肢機能検査、パーデューベグボードテストを実施した。また、上肢の感覚機能の調査として、Semmes Weinstein Monofilament テスト、二点識別覚検査を実施した。得られた結果は対象者と同年代の平均値もしくは標準値と比較した。

なお、本研究は国立障害者リハビリテーションセンター倫理委員会の承認を受けた研究事業の一環として行い、対象者および家族より書面による同意を得た。

【結果】

握力の結果は 27.2 ± 4.0 (kg) であり、年代の平均値よりも低く、年代の平均値から2標準偏差を減じた値よりも低い傾向であった。

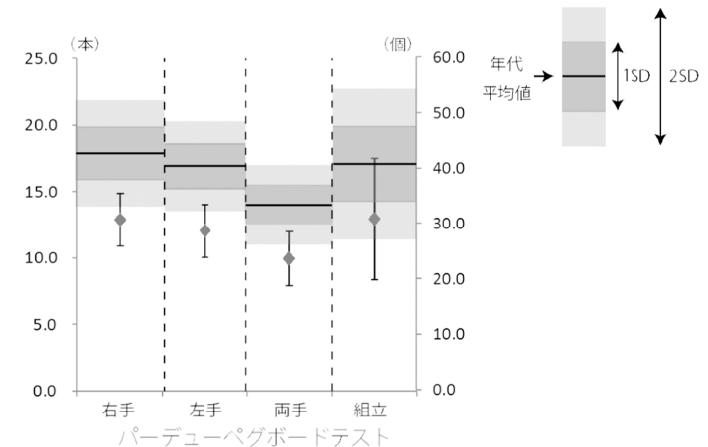
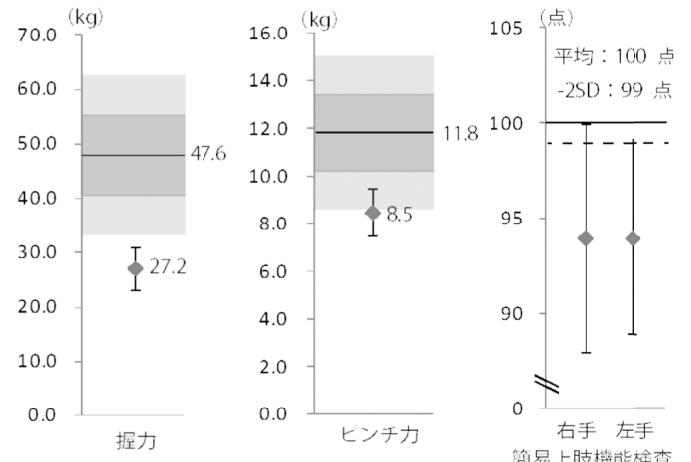
ピンチ力の結果は 8.5 ± 1.0 (kg) であり、年代の平均値よりも低い傾向であった。

簡易上肢機能検査の結果は右手 94 ± 6 (点)、左手 94 ± 5 (点)であり、年代の標準値よりも低く、年代の標準値から2標準偏差を減じた値よりも低い傾向であった。

パーデューベグボードテストの結果は右手 13 ± 2 (本)、左手 12 ± 2 (本)、両手 10 ± 2 (本)、組立 31 ± 11 (個)であり、同年代の会社での生産的作業に従事する従業員の平均値よりも低い傾向であった。

Semmes Weinstein Monofilament テストの結果は全例で正常範囲であった。

二点識別覚検査の結果は1例のみ軽度異常を認めたが、7例は正常であった。



【考察】

青年期発達障害者の上肢機能は、同年代の平均的な上肢機能に比べ、握力、ピンチ力、簡易上肢機能検査、パーデューベグボードテストの全てで低い傾向にあった。一方、感覚検査は正常範囲内であった。

握力は全般的な体力を示すと考えられているが、本研究の結果より、青年期発達障害者の体力は低いものと考えられ、就労レベルよりも低いものと考えられた。簡易上肢機能検査は協調性を、ペグボードテストは巧緻性を評価できる。本研究の結果より、青年期発達障害者の協調性や巧緻性は同年代の平均よりも低い傾向にあることが分かった。さらに、ペグボードテストの結果より、巧緻性は作業レベルよりも低い可能性があることが分かった。他方、感覚検査は正常範囲であった。よって、青年期発達障害者で確認された上肢機能の低下は、感覚による低下ではなく、協調性や巧緻性などで必要な微細運動機能の低下である可能性が考えらる。

就労支援の実施に際して、青年期発達障害者の上肢機能の評価および介入が必要であると示唆された。